

# YA

2006  
No.  
21



これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。



### 私の稀観本ノート その21

○中蘭英助氏恵贈の雑誌  
「新潮」2001年4月号

椎窓 猛

雑誌も新聞とおなじくある年数がたてば、貴重な資料、記録として価値が生じてくる。

この雑誌には氏の遺稿ともなった「南蛮伝」のうちの「矢部川」の章が掲載されている。それには付箋がつけられ、私宛のみじかいたよりがしたゝめられている。私はここにとりだしたように、雑誌に貼付したのである。この「矢部川」の章には山峡の神話、日向神の奇岩、八女津媛の棲み所としての記述も見える。

八女中卒業と同時に、中国大陸へ渡った中蘭さんも晩年にはうぶすな八女の地に思いを深く寄せている。

八女市見崎中学校には、中蘭さんの略歴、それに寄贈と思われる本が並べられる。生徒たちはどのような思いで手にとっているだろうか。

(自分史図書館長)

### ○私たちの百年

惣ちゃんは戦争に征った

語り・貞刈惣一郎

文章・貞刈みどり

(海鳥社刊)

貞刈先生は新制中学出発当初の昭和26年矢部中学教諭として赴任、ときの校長が私の父均であった。第5章、教壇に立つには着任当初、校長との対面の場が描かれている。

「先生はどんな教育を望まれますか」「捨てられてなお咲く花の憐れさにまたとりあげて水与えたりという言葉が心の中に温めていました」「それこそ教育の真髄です。先生をお迎えして私も嬉しいです。」温厚な校長だと描かれていて、私もしばし懐旧の念に包まれました。

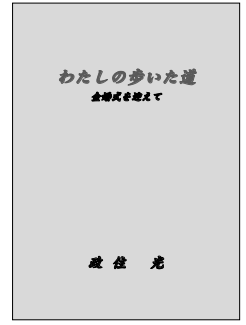
この先生は戦争のころは、兵士として満州へ。日ソ開戦、シベリア抑留、復員後、教師の道へ。定時制高校教諭、昭和45年、自宅に筑紫児童図書館を開設、教職退任後、太宰府政庁跡を中心に史跡解説ボランティア活動つづけられること36年間、



1万団体、延べ50万5千人の案内。85歳で修士となられるが佐賀大学院に入学は82歳の春のこと。まことに勤勉精励、奉仕の精神に一徹、誠心の人柄である。

なかでも第3章シベリア抑留体験記は、凄絶。エゾマツ、トドマツ、カラマツの伐採作業。朝食、黒パン徳用マッチ箱の半分ぐらい。大豆2～3粒のスープ。10月には雪。馬は零下30度になれば倒れる。「ああ、俺はぼた餅、食いたい！」みんなで笑った一夜も、隣の兵士が起きないので呼びかけるが、冷たくなっている。

聞き語り、奥さまの文章がすばらしい。



○勝機なきビルマ戦  
「菊兵团」火砲とともに  
武末 達三郎

著者武末さんは通商産業技官を勤めた方だが、フーコン作戦、断作戦、メイクテラ会戦、ビョウボエ会戦、シッタン作戦とビルマ戦線歴戦参加の元陸軍中尉の従軍記である。まえがきに「私も今日まで生き長らえて70歳をとっくに過ぎて老境に入った。兵役の期間は20歳代で非常に短い年月。私の戦場はビルマ。今のミャンマー。当時の熾烈なる各戦場での様相が鮮やかに蘇り、いまだに私の脳裏を離れない。戦没した多くの靈魂が私の身代りになってくれて、今日まで生き延びられたという観念を捨てることができない」と述べられている。

戦後61年の夏。こうした戦場の記録を読めば「平和」の尊さが身にしみてくる。

志岐信次歌集 “一路”  
師の歌碑にそそげる酒の匂ひ立ち昼ひとつ鳴くこぼろぎの声  
秋めける日ざしなるかも町並みに垂れたる白き日蔽ひに  
ひそやかに秋の日向を吹く風に蜂が流れてゆきにけるかも  
いでくれば庭一面の月夜なりコスモス白くしんと咲きたる  
ほそぼそと生きるこの身のありがたし写経に今日の心澄みゆく  
(大川市榎津・米寿を記念し)

中山陽右歌集 “明日の森”  
ふるさとに亡き父の名で残り居る林は荒れて小鳥啼くのみ  
点滴瓶吊るせる機具をころがして風を見ようと窓際へ行く  
ままごとのセットを孫へとり出して頒ち合う花のような心も  
今日からは取り越し苦勞止めようとつま立ちてもぐ秋のさびの  
老いかたが下手くそのまま父の死の齡を越えて冬に息づく  
(佐賀市在住・ひのくに「同人」)

○わたしの歩いた道  
一金婚式を迎えて一  
政住 光

筑紫野に農をいとなみ、誠実一路に歩みつづけられたアルバム主体の自分史である。政住さんは昭和6年の生まれ。地域に根をおろしいとなまれた生計は、とりもなおさず昭和に生きた民の農業史ともいえるし、堅実な家族史とも読みとられる。政住さんは16歳のときから農業にいそしまれたその日歴が写真によって浮かびあがっている。いかげ屋、かさの修理、下駄の歯がえ屋などを知る者はもはや数少ないのではない。



編集掌記

▼風立ちぬ、いざ、生きめやもーやあ、YA早や爽涼の秋、虫の音もしげく灯火親しむの候。そして読書の好シーズン。  
▼去る八月十五日には、鹿児島島の桜島へ渡った。作家梅崎春生の名作『桜島』の一節、「赤と青との濃淡に染められた山肌は、天上の美しさであった」と刻まれた文学碑。その除幕式へ参列。若いころ、梅崎さんの作品にはずいぶん傾倒し、読んだものである。あの文学

青年もはや喜寿の齡。梅崎さん没後四十年、『桜島』は昭和二十一年九月雑誌『素直』に発表されたものだから六十年の歳月が過ぎているが、作品は今読み返しても鮮烈。  
▼碑建立の場所は国立公園だそうで、碑建設に尽力のNPOがごしま文化研究所みたけさんの話では、手続が大変であつたらしい。それでも委員長の献身的な努力があつて実を結んだとの回想。こうした事業にはこうした人の存在なしでは完成しないものである。  
(T・S)

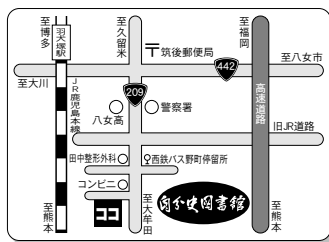
蔵書目録③ができました ¥160 送料込(郵便切手可)

吉本信託図書館

入館無料  
開館／  
午前9時  
～午後5時00分

休館／  
日曜、土曜日、祝祭日、  
年末・年始、その他休館  
することがあります。  
予めご確認下さい。

貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8  
TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分

インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。